

また暑い夏が過ぎます。「今年は暑いね」と言う言葉をよく耳にしました。が、毎年同じ言葉ばかりです。暑くない夏など基本的にありません。暑くない夏の方が異常ではないでしょうか。でも実は、今年は2月の大雪のころから例年とは違う天候の流れが始まったのかも知れません。また、梅雨には大雨が多く、梅雨明け前後は、雨が降ったり暑くなったりと両極端で、少し変わった夏であったと思います。

天候と自然の変化について考えるのが好きな私は、特に動物の増加や減少の変動がどうしても気になります。例えば、今年の夏は夏鳥であるキビタキやオオルリが多く見られました。あきる野であまり確認していなかったサメビタキも、今年は標高の高い場所によく見かけました。雨が多い年には、アオダイショウやニホンマムシが多くなることをあらためて確認しました。両生類と爬虫類は、気温や雨量などの変化に影響を受けやすいものです。一方、猛禽類のハチクマやサシバ、いろいろなチョウ類やトンボ類の減少が

見られました。

大変な季節を乗り越え、繁殖に成功する動物のことを考えると感

動します。一方で、自然の影響であるのか、人間の影響であるのか、どちらの影響が大きいのかよくわかりませんが、失敗を繰り返し減っていく種類もあります。結果的に、変化がそれほどないように見えながら、自然は常に変化しています。

台風の影響で、倒木が発生し、土砂崩れなども起きることがあります。それもやはり、「自然の流れ」です。日本の自然のエピソードですが、人間に影響が出た場合には、「自然の流れ」ではなく、「災害」と言います。人間の都合と自然の都合は永遠に合うことはない、ということについて深く考える必要があるのかも知れません。

(パブロ)



あきる野市で生まれた
サメビタキの幼鳥